

提 眞

美は真。深は新なり。

篆刻家 綿引千齋



筆者紹介

篆刻家・書家。毎日書道展同人会員。
毎日展準大賞、日展入選作家。日本書
道美術院審査員、県書作家連盟理事・
審査員、県総合美術展覧会招待・審査
員等を歴任。いわき市在住。

今回、特にご無理をお願いして、篆
刻「延年益寿」と書「自在天」を揮毫
していただいた。本名、欣吾。

美ということは、一般には「美しい」ことで、「醜」に対する「美」であるが芸術の目標とするのは必ずしも「醜」に対する「美」ではなく、それを究めることが造型意識を養うことで、ただうまくなればいいことではない、一步を深めて真に物を知るということで、「美」と「真」は一致するものと思うのである。

書は篆刻も含めて古来諸芸の裡でも小さな芸とされ
た。画や彫刻その他に比べ道具も時間も要らず、一管
の筆、一本の鉄筆で了る。小枝といえども小枝だが、已
に成年を過ぎた者が全魂を傾けてなお、自己の満足の
域に達しない悩みを覚えるのは何故であろう。

芸の高きはその人の教養に比例するもので、常に自
己を凝視し、心意気を高處に置く。殊に書、篆刻はそ
の言葉を適切に反影する芸域で、詩、画、書を一部門
の芸道とみて、これを深く研鑽するとなれば、勢い、
この諸芸にも心を求めなければ、大成は望めないとも
いえる。その養う所が浅ければ、自ら意興の浅きを露
わすこと疑いない。この最も簡単とされるものの裡に
最も複雑さを藏している為かもしれない。

芸術とは地味な仕事で、孤独と辛抱がつきまとつ。

中国及び日本の書道は伝統が古く、幾多の名品の遺
作が珍重され、世界的な鑑賞者の視聴を傾けさせてい